

ポーランドとさまよえる 『ゲーテンベルク聖書』



経済学部教授 藤井 和夫

このたび関西学院大学図書館に『ゲーテンベルク聖書』の復刻版（デジタル化ファクシミリ）が納入された。それは、完本の形で現存するゲーテンベルクの印刷によるラテン語聖書21部のうちのひとつで、オリジナルはポーランドのペルプリン神学校図書館が所蔵し、ゲーテンベルク生誕600周年、活字印刷550周年を記念して、日本のデジタル技術を用いて復刻されたものである。

『ゲーテンベルク聖書』についてはすでに紹介されたこともあるので、ここでは同書の運命とポーランドの歴史との関わりを紹介してみたい。『ゲーテンベルク聖書』は「さまよえる」という形容詞を冠して呼ばれるように、さまざまな経緯で世界中に散らばって現存している（以下同書についての記述は、おもに富田修二『さまよえるゲーテンベルク聖書』慶應義塾大学出版会、2002年による）。ゲーテンベルクによって1455年頃マインツで160～180部印刷された後、ワインの樽に詰められてヨーロッパの各地に送られ、各地で個性豊かに彩飾が施された。ペルプリンの聖書はリューベックで彩飾されている。その後どのような経緯でポーランドにもたらされたのか詳細は不明ながら、おそらくヘウムノの司教ミコワイ・フラピツキ（1496～1508年）によって入手されたこの2巻本の聖書は、ルバーヴァのフランチェスコ会（富田氏によればベネディクト会）

に贈呈され、1833年にペルプリンに移された。

ペルプリンはポーランドの北部、グダンスク市の南約50キロメートルにある、ヴィスワ川にほど近い小さな町（現在人口8,500人）である。初めて歴史に名の現れるのは1274年、その2年後からシトー教団の修道院と教会が建築され始めた。966年にキリスト教化したポーランドに、1226年以降マゾフシェ公コンラートの要請を受けてドイツ騎士団が入植活動を始めるが（その拠点はペルプリンからさほど離れていないヴィスワ川を挟む有名なマルボルクである）、そうした西欧修道会の東方植民の一環としての修道院建設であった。以後修道院は、歴代のポーランド王から数々の特権を与えられて発展し、王や諸侯の訪問も多く、1683年にトルコ軍からウィーンを救ったことで有名なヤン・ソビエスキ3世王も1677年に家族と共に当地に滞在している。1772年に始まるプロイセン・オーストリア・ロシア三国によるポーランド分割から第1次世界大戦まで、この地域はプロイセン（ドイツ）領となり、1823年に修道院は閉鎖されたが、教会は翌年からヘウムノ地方の司教区を中心大聖堂となった。1928年以降は司教区博物館でもある。

84メートルの身廊をもつ2,200平方メートルのゴシック様式の大聖堂は、ポーランドで最も美しい聖堂の一つに数えられ、内部の17世紀前半の後期ルネッサンス様式の金の主祭壇は、ヨーロッパで2番目に大きなものである。棟続きに宝物庫や修道院、図書館があり、『ゲーテンベルク聖書』を所蔵する神学校の図書館は、12世紀の手書きの写本による聖書をはじめ貴重な書籍類5万冊を擁していた。シトー教団は清貧・服従・労働生活を信条として開墾や耕作労働に従事した修道会であったが、ペルプリンでは特に印刷業が発展し、ポーランドで最初の印刷所が設置された。『ゲーテンベルク聖書』がこの地で大切に保管されてきた理由もうなずけるわけである。一方でペルプリンの神学校は、数多くの研究者や学生を引きつけて活発な研究活動が行われ



ただけではなく、分割時代には列強の支配下で、ポーランドの民族性や民族文化を守り続ける重要な拠点としての機能を果たしていた。1866年には平民連盟の指導者ステファンスキによって農民協会が設立され、愛国的な教育もなされている。

このように、ポーランドにおけるカトリック教会は、単に宗教のシンボルであるだけではなく、18世紀末以来100年以上にわたる民族国家滅亡の歴史の中で、民族文化や伝統を守り、ポーランドの民族意識そのもののシンボルでもあったのである。ペルプリンの『ゲーテンベルク聖書』の運命も、この点に大いに関係しているように思われる。きわめて価値ある聖書ゆえに、これを売却して教会や神学校の拡張資金に充てることが考えられたこともあったが、人々の強い反対の前に、それが実行されることはついになかった。1939年9月1日にナチスのグダニスク侵攻によって第2次世界大戦が始まると、いち早く聖書はペルプリンからワルシャワの銀行に移された。ペルプリン修道院の至宝であるばかりでなく、ポーランドの国民的財産であり、カトリックの命でもあるこの聖書は、再びポーランドの民族と国家を支配しようとするナチスの手に委ねるわけにはいかなかったのである。そしてここから、まさに「さまよえる聖書」として波乱に満ちた経歴を辿ることになる。

ナチス侵攻後一カ月足らずで陥落したワルシャワから脱出して、聖書はパリに移された。フランスでは、同じくナチスの略奪の難を逃れてクラクフのヴァヴェル城からルーマニア経由で運び出された美術品や財宝も『ゲーテンベルク聖書』と運命を共にすることになった。やがてフランスにもナチスの支配が及ぶと、今度はロンドンのポーランド亡命政府の指示で、イングランド、スコットランドを経て、大西洋を渡ってカナダへ向かった。カナダにおけるこれらポーランドの財宝は、ロンドン亡命政府の駐オタワ大使の管理下に置かれ、ポーランドの国土と国民がナチス支配下で悲惨な状況に置かれていた間も、かろうじてナチスの略奪から逃れていることができたのであった。

しかしながら、1945年にナチスが破れて第2次世界大戦が終了し、亡命政府との抗争を経てポーランドにソ連の後押しを受けた共産党勢力を中心とする新政権が生まれると、新たな危険がこの「さまよえる聖書」に迫ることになった。共産党当局者が、これらの財宝の引き渡しをカナダに求めたのである。もしも彼らが財

宝を手に入れていたなら、多くの例のようにそのほとんどは結局ソ連の奥深い保管庫の中に納められて、二度とポーランド国民の前には戻ってこなかったかもしれない。まるでドラマのような駆け引きがカナダを舞台に展開され、結局、カナダ・カトリック教会、モントリオール銀行、ケベック州政府の協力などによって、聖書を含むポーランド国民の財宝は当時の共産党当局の手には渡らずにすんだ。亡命政府側と共産党政府側の間で合意が成立して、財宝がポーランド国民の手に返還されたのは、ようやく1959年のことであった。

この辺りの事情は、ちょうど廃墟と化したワルシャワの戦後復興をめぐる動きと相通ずる。ポーランド人の蜂起への報復として、ナチスはワルシャワの歴史的な建物の一つ一つに爆薬を無数に仕掛けて丁寧に爆破していった。戦後瓦礫の山と化したワルシャワの街を、近代的な都会に一新させる復興案にポーランド人たちは徹底して反対し、結局旧市街を中心にした歴史地区は、戦前の姿そのままに、瓦礫の中から以前のレンガを拾い集めるように忠実に再現された。しかしソ連の指導部は、ポーランド王国の歴史の詰まった旧王宮のみは、戦後の新体制への反発を助長することを恐れたのかなかなか許可しようとしなかった。しかし市民は無許可にもかかわらず王宮復興の資材をせっせと集め始め、やがてその完全な復興を成し遂げたのである。再建された建造物であるにもかかわらずユネスコの世界遺産に登録されたワルシャワの旧市街と王宮には、ポーランド民族の自らの文化遺産への強い愛着の思いがこもっている。同じく、さまよえる『ゲーテンベルク聖書』にも、ポーランド国民の自らの文化遺産に対する熱い思いがこもっているのである。



藤井 和夫 (ふじい かずお)

関西学院大学経済学部教授、人権教育研究室長
 専攻はポーランド経済史・経営史
 19世紀の繊維工業の発展や企業家の社会活動等を研究している。
 主な著書は『ポーランド近代経済史－ポーランド王国における繊維工業の発展(1815-1914年)－』(日本評論社、1989年)。